

九ノ一七、後醍醐天皇に従った東大寺僧の名（東大寺雜收録）

出典 東大寺雜收録卷八

解説 太平記によれば、元弘元年八月二十五日に後醍醐天皇は京都を逃れて東大寺東南院に入ったが、全山一致しての与力が叶わず、二十六日には鷲峰山、二十七日（笠置寺縁起には二十九日とある）に笠置寺に入ったとする。

笠置寺縁起には「東南院の僧正御坊聖尋御供に御參。其外御共の公卿五人、各乗馬、警固の武者五十騎、次に法師三十人歩行の御共也」とあるが、この内の主だった東大寺の僧名が東大寺雜集録卷八に記載されている。

東大寺雜集録は室町時代中期から江戸時代中期までの東大寺に関する諸記録を集めたもの。原本はもと東大寺の塔頭薬師院に所蔵されていたものである（東大寺辞典）。大日本仏教全書一・二に所収されている。

原文

（前略）

高倉

治承四<sub>十</sub>庚<sub>子</sub>東大興福三井寺兵火。

後鳥羽

文治元<sub>巳</sub>大仏開眼。

建久元<sub>戌</sub>東大寺棟上。

土御門

承元元<sub>卯</sub>榮西主<sub>三</sub>東大寺幹事<sub>一</sub>。

四条

仁治元<sub>庚</sub>去年五月四。從<sub>二</sub>大仏眼<sub>一</sub>血出。

後柏原

永正五<sub>辰</sub>東大寺焼亡

正親町

永祿十<sub>辰</sub>十月十日。大仏殿爲<sub>二</sub>兵火<sub>一</sub>燒。

靈元

寛文七<sub>丁</sub>二月十二日。二月堂炎上。仏在<sub>二</sub>灰中<sub>一</sub>。世<sub>三</sub>始<sub>二</sub>拝<sub>一</sub>。

元祿元<sub>辰</sub>四月。南都大仏殿新始。

五<sub>壬</sub>自<sub>三</sub>三月八日<sub>一</sub>至<sub>二</sub>四月八日<sub>一</sub>。南都大仏開眼供養。

○笠置城中供奉人東南院聖尋僧正。俊増、静密、行海、治部房圓美。

○今度親王公卿僧正六人。其外生虜人口数大名預<sub>レ</sub>ラル。東南院僧正<sub>ヲ</sub>ハ常陸所司時朝<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>預。

（後略）